

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

山本 清治

【所属】(助成決定時)

神戸大学大学院保健学研究科

【研究題目】

シリア難民障害者の母国への帰還達成に必要なリハビリテーション支援

【研究の目的】

シリア紛争は2011年から継続し、シリア隣国ヨルダンには661,859人のシリア人が国連難民高等弁務官事務所(以下UNHCR)に難民登録されている(UNHCR,2019)。ヨルダン国内の都市居住難民は81%になり、その難民の約28%は戦傷や先天性の障害を有する(Handicap International,2014)。しかし紛争時には障害者は支援のメインストリームから阻害されやすい状況に陥りやすいという報告があり、多くの障害者を生み出しているシリア紛争における障害者支援は喫緊の課題である。研究代表者は都市在住シリア難民障害者のヘルスリテラシー不足と社会参加制約の関連について原著論文で報告した(山本,2017)。しかし先行研究では、都市在住シリア難民障害者が活用できる社会資源や母国帰還に向けた課題について明らかになっていない。本研究では、都市在住シリア難民障害者の母国シリアへの帰還に向けたリハビリテーション専門職による介入課題について明らかにすることである。

【研究の内容・方法】

1.研究対象者

本研究の研究対象者は研究代表者が専門員として参加した外務省緊急人道支援事業「ヨルダンにおけるシリア難民内戦負傷者支援事業」で連携対象になったヨルダンの首都アンマン在住シリア難民障害者支援に従事する現地リハビリテーション支援団体が支援対象とする首都アンマンに居住する身体機能障害を有するシリア難民障害者から無作為抽出した。

2.データ収集及び分析方法

2020年1月に研究代表者が首都アンマンに居住し、各支援団体が支援対象としている身体機能障害者を有する難民に、研究の目的と趣旨を口頭と文章で説明し承諾を得て個別の半構造化面接を実施した。面接では対象者の属性(氏名、年齢、ヨルダンの滞在年数、疾患名、家族構成、家族収入、障害自立度)について聴取し、半構造化面接では1)ヨルダンでの生計における状況、2)現在の生活における困難、3)現在の社会参加の状況、4)現在の支援受給状況と支援のニーズ、5)ヨルダン定住またはシリア帰還への展望、6)シリア帰還を困難と捉える要因について質問を実施する。面接はインタビューガイドに沿って実施し、面接内容は承諾を得てICレコーダーに録音して保存した。2020年2月以降に研究代表者が面接内容を逐語録化し、国際協力及び難民障害者支援に精通する研究協力者2名とともに継続的比較法を参考に逐語録からサブカテゴリー、カテゴリーを抽出し、都市居住シリア難民障害者の社会参加の状況とリハビリテーション支援の課題について分析を行った。

【結論・考察】

研究参加者はヨルダン首都アンマンに居住する男性9名、平均年齢と標準偏差は 28 ± 3.8 才、疾患名は脊髄損傷8名、末梢神経損傷1名であった。半構造化面接データから、4つのカテゴリー【都市在住シリア難民障害者は貧困に直面している】、【居住住宅から外部へのアプローチに物理的バリアがある】、【シリア難民障害者へのリハビリテーション支援が不足している】、【祖国が紛争の影響で帰還できない状況である】に分類された。本研究の結果から、ヨルダン首都アンマンに居住するシリア難民障害者は、リハビリテーション専門職による介入不足や健康面での課題だけでなく、生計や物理的障壁が避難先コミュニティでの社会参加制約に関連しており、また紛争継続の影響により母国への帰還が困難になっていることが明らかになった。今後のリハビリテーション専門職の支援において、医療的介入に留まらず環境因子や社会参加への介入の必要性が示唆された。